

土曜日の夜十一時。最後のスタッフが搬入口から帰っていく音を聞きながら、僕は一人でケーブルを巻いていた。

ここは成人向けの配信番組を撮る小さな制作会社で、僕は三週間限定のスタジオ補助バイトとして雇われている。仕事は機材運びと小道具の洗浄、それから撮影後のセット清掃だった。

「もう上がってもいいよね……」

誰もいないバックヤードで、畳んだタオルの山へ突っ伏しながら呟く。今夜の仕事は全部終わったはずだった。タイムカードを切って、コンビニで適当な夜食を買い、帰ったら朝まで眠る。それだけを楽しみに、散らかった備品を片づけていた。

「よし。今日はもう終わり」

ロッカーから上着を引っ張り出したところで、防音扉が勢いよく開いた。顔を出したのは、配信部門

の責任者をしている三十六歳の芦原監督だった。普段は何が起きても表情を変えない人なのに、今夜に限って少しだけ眉間へ皺が寄っている。

「まだ残っていたか。悪いが、十分だけ手伝ってくれ」

今夜は、カントボーイを囲んで撮る新しい配信企画のリハーサル日だったらしい。

ところが主役のモデルが直前になって音信不通になった。組み上げた壁とベッドのセットは、日が昇れば次の番組用に解体される。せめて複数の演者が入ったときの距離と、新しく導入したカメラの死角だけでも確認したいのだという。

「服は着たままでいい。中央に立ってもらい、四方向の画角を合わせる。それで終わりだ。記録データも残さない」

僕はただの短期バイトで、演者ではない。

そして今日来ることになっていたモデルと同じ、カントボーイだった。

(ただ、撮影の確認、ただだよね……)

明日の朝には壊されるセットだと聞けば、強く断ることもできなかった。

「それ以外は、絶対にしませんからね」

「分かっている。君の仕事を増やすつもりはない」

防音扉の向こうには、三人の男性演者が残っていた。明るい茶髪を無造作にかき上げて笑う日野さん。人との距離を詰めるのが早く、冗談めいた甘い口調で相手を油断させるタイプだ。黒いシャツを腕まくりしている久我さん。鍛えた身体に似合うぶっきらぼうな話し方をするが、撮影前の確認だけは細かい。そして笹川さんは、三人の中で最も物腰が柔らかい。敬語も微笑みも崩さない代わりに、何を考えているのか一番分からない。バイト中に何度か挨拶しただ

けの相手と、照明の真下で向き合うのは初めてだった。壁とベッドで作られた白いセットを、四台の小型カメラが囲んでいる。芦原監督は僕を青いテープの中央へ立たせると、一人だけガラス窓の向こうの調整室へ入った。

（週末は映画でも見て、少しは有意義に過ごしたいな……）

これから来る二日間の休みについてぼんやり考えていると、天井のスピーカーから芦原さんの声が響いた。

「画角確認を始める。三人とも、仮台本の順番で動け」

カメラは回さないと言っていたとおり、レンズの上にあるランプは消えていた。

「最初は腕と肩だけ。怖がらなくていいですよ、大

智」

「嫌なら手え振れ。監督より先に俺が止める」

「まあ、緊張した顔もかわいいけど。今日は見るだけにしておくね」

演者たちが口々にそう言って、僕を囲むように配置についた。帰り支度をしていたはずの僕は、三方向からレンズを向けられたセットの中央で、三人の男性演者に囲まれていた。

「帰る寸前だったんでしょう。災難でしたね、大智」
「十分で終わるって聞きました」

広いセットの中で、それぞれが自分の立ち位置につく。笹川さんは立ったまま、久我さんと日野さんは距離を測るようにしゃがんだり近づいたりしている。僕も本当は帰りたかったけれど、芦原さんの頼みを断りきれず、その場に残っていた。あまりに長引くようなら、途中で抜けさせてもらうつもりだった。